



蛸、烏賊と

馬鹿

なまぬるい初夏の風が、にわか雨を運んできた。

平賀ユキは店先で傘を畳み、肩やスカートの裾についた雫を払った。

その間に、ムツは首尾よく長細のビニール袋を手に入れていた。曲がった背を余計に曲げて屈み、スッと傘を包んだ。ビニール袋の口を軽くひっぱり、柄の部分できゅっと結ぶ。その手際は出勤前の夫のネクタイを締める新婚妻のようだった。

「大丈夫ですよ。お義母さん」

言いながらユキは、右手の裾でムツの肩についた雫を拭った。

「念のため」

「水滴でひっついて、落ちないですよ」

「念のためね……」

ゲームセンター「クレー」。入り口の引き戸を開くと、まずはタバコとトイレの芳香剤が混ざり合った場末臭が客を出迎える。店内は薄暗く、それが場の雰囲気を生み出すための演出でなく、また店名を忠実に反映しているわけでもないのは、窓際一列の蛍光灯のみが消されており、カーテンは全開で、太陽光をできるだけ取り込もうとしている事からもはっきりしていた。

この町のゲームセンターは絶滅の危機にある。ユキが他県からこの地に移り住んだ当時は、他にも三軒のゲームセンターがあったが、二軒は一昨年パチンコ店に変わり、もう一軒はまず輸入雑貨屋になって、それから居酒屋、喫茶店を経て、去年やはりパチンコ店になった。

「これ、やってみますか」

二人は「スウィート・ランド」の筐体の前に立った。

ホテルや旅館のちょっとしたゲームコーナーでもしばしば見かける、ドーム型の景品獲得ゲーム機である。1プレイ百円。コピー紙に手書きされた貼り紙はうっすらと透けていて、以前は三十円だった事がわかる。

二個のボタンでクレーンを操作し、1のボタンでまず回転する壕から小さなお菓子をすくいあげる。2のボタンでそのお菓子を可動式の台に落とし、景品の受け取り口まで導く。という、いたってシンプルなゲームである。

ユキはさっそくコインを投入した。ピロンと音がして、「1」とクレジットが表示される。「よし」頃合いを見計らって、最初のボタンを押した。

クレーンの歯が空をかき、チロルチョコの畝に食い込む。一見深く入り込んだ様に見えたが、実際に引き上げられたのは2個のチロルチョコのみであった。一瞬期待を持たせるところはUFOキャッチャーと同じである。

「あー……」

思わず声を発したのは、背後から様子をうかがっていたムツの方だった。

そこでユキが、得意げに返す。

「ここからでっせ」

ユキには勝算があった。それと調子に乗ると語尾に「でっせ」をつける癖もあった。彼女はちゃんと、明確な意志を持って台を選んでいたので。

現在ユキがプレイしている台には、チロルチョコ、アポロといった箱系のお菓子が多い。もう一方の台は、ミルクキーやキットカットなどの袋系である。袋系のお菓子は形が大きく、有利に見えるが個々でぶつかりあった時、立ち上がったたり、左右に流れたりする。箱は安定しているし、力が面で伝わるのだ。

ユキはまたタイミングを見計ってクレーンからチョコを落とした。既に可動式の台上にあった小粒のチョコが干渉し合った結果、まずは2個のチロルチョコがそろっと押し出される。続いて箱のアポロチョコが追いかけるように取り出し口へと導かれた。ガコン、と勝利の音色が二人の足下に響いた。

「あ！」

甲高い声が天井に跳ねる。それが自分のものと気づいたムツは照れて口を覆った。

「……じょうず」

「こつがあるんです」

ユキもまた照れて、それを隠すように勢い良く景品回収口からアポロを取り出した。

「昔、久弥さんに教わったんですよ。どこだったかな……まあ、こんな感じのゲームセンターで」

「へえ……。あの子、小さい頃から不器用だったんだけどねえ。リンゴの皮も上手くむけない、エビの背わたもとれない」

「ゲームは別なんですよ。男の子って」

ユキは対戦ゲーム機を指差して、

「ああいうのとか、特に好きだったみたいです。あの人ったら、店に入るなりスコアが更新されてないか確認するんですよ。ゲームしてる時の目もとにかくきらきらしてて。指の動きが……なんていうか、蜘蛛かっけくらい素早くて」

「なんでかしら……子供の頃、ゲーム機買ってやらなかったってわけでもないんだけどね……」

「人一倍好きなんだと思いますよ、久弥さんの場合。家じゃなくてわざわざこういう場所に来て、友達とワーってゲームするのが。あの人、敵に攻撃されたら大声でイテエ！とか言うし」

「恥ずかしいねえ……」

「そう。私も最初は恥ずかしくて……あ、そうそう。思い出しました。私たちの初デート、ゲームセンターだったんですよ」

「ばっかだねえ！ あの子は！」

ムツの最後の応答は、現実のものではなく、ユキが脳内で補完したものだった。

実際のムツはただ生真面目に、申し訳なさそうに頷いていた。

そんな彼女の姿を目にするたび、ユキは歯がゆさを覚えずにはいられなかった。

「ばっかだねえ！」それが口癖で、我が子ばかりでなく、近所の子供や茶飲み仲間たち、テレビ

の中のタレントや政治家と当たり構わず毒づいた。その言葉は大抵の場合、文字通り批判を意味していたが、時に賞賛や激励であった。特に一人息子、ユキの夫である久弥に向かってそれを言う時は、けなしているようでいて、その愚かさを全身全霊で誉め称えているように、ユキには聞こえたものだった。

かつてのムツは、覇気の塊だった。

少なくとも、傘入れのビニールの口を律儀に結ぶような人ではなかった。

家の中では常にせわしなく立ち働き、ユキが少し気を抜いている間に、炊事洗濯、風呂トイレ掃除布団干しに買い物と、家事をあらかた済ましてしまった。これは新手の嫁姑戦争だと結婚当初は思ったものだが、それも実際には違っていた。ムツはあくまで自分自身をじゅうぶん活かすために、何より楽しむために働いていたのだ。ユキに対して嫌味や皮肉を決して言わなかったし、態度でそう示すこともなかった。むしろミスをした時にこそカラリと明るく、ユキが夜更かしして寝坊した朝や、久弥とささいなことで喧嘩をして、泣きはらした顔で迎えた朝に、彼女は不敵に笑って言うのだった。

「ばっかだねえ！」

ユキは何度もその言葉に救われてきた。

「お義母さん、これは知ってます？」

ユキは店内の奥まった場所にある、一台のゲーム機を指した。

「……なんだろう。おばあちゃんの時代にはなかったんじゃないかね」

自分をおばあちゃんと呼ぶ。それも以前には有り得なかったことで、ユキは胸元を冷たい風が通り過ぎるのを感じた。

二人の前には、「タコイカパニック」のマシンがあった。マシン角の塗装は剥げ銀色がむき出しになっており、布製のハンマーは持ち手までが煤けている。

「ワニワニパニックのパクリっていうか、モグラ叩きのパクリっていうか……」

「モグラ叩きなら、わかるわあ」

「でも、出てくるのがちょっと厄介で」

六つの穴から飛び出すのはモグラではなく、表面タコ、裏面イカという異種混血生物（キメラ）である。これらがぐるりと身を翻して顔を出すので、プレイヤーはスピーカーからの「タコ！」「イカ！」という指示に従って叩かなくてはいけない。その点、モグラ叩きよりも難易度は高いといえた。

「とりあえず、やってみましょうか」

ユキはさっそくコインを投入した。腹痛のような濁ったトロピカルな音色と共に、さっそくゲームが開始する。

「あんまり無理はしないでね。お腹にさわるから……」

脇に移動しようとしたムツに、ユキはすかさずハンマーを手渡した。

「……え、え？」

「お義母さん、ファイト」

あえて有無を言わさぬ口調で告げた。

既に一匹目のタコ、あるいはイカが穴から顔を出していた。

イカ！

うろたえていたのは一瞬で、ムツは反射的にハンマーを振り下ろしていた。ポフッ、と綿の軽い音。ハンマーを手元に戻す間もなく、めまぐるしくタコイカが飛び出してくる、もはや考えている暇はない、ムツはゲームに参加していた。

ばーか

タコイカパニックではお手つきをした場合、その音声が流れる仕組みになっていた。心底憎たらしい、子供が赤い舌を出し顔面をのぼして発するような声色である。一瞬苦い汁を飲んだような顔をしたムツの傍で、ユキは内心ほくそ笑んでいた。

タコ！

イカ！

タコ！

イカ！

ばーか

イカ！

タコ！

タコ！

ばーか

タコ！

ばーか

ばーか

ばーか

ばーか

何度目かの「ばーか」で、ムツの目が鈍く輝いたのをユキは見逃さなかった。身を屈めてハンマーを持つ後ろ姿は座頭市さながらの瘴気をまとっている。突如現れた修羅に気圧され、タコとイカは若干スピードを落としたかのように見えた。

この姿だ。この姿が見たかったんだ。

ユキは傘の柄を握りしめ、その背中表情をうっとりと眺めた。

「失敗しちゃったわ……」

ゲーム終了のブザーと共に振り返ったムツは、元の萎れたおばあちゃんに戻っていた。

「……もう一回、やりませんか？」

「いい、いい」

ムツはハンマーを投げ出して両手を垂らし、あからさまに疲れた表情をこしらえた。

「でも、結構いい点数出てますよ。このゲーム、攻略法なんか無いんです。必要なのは反射神経のみ。軽い当たりでも有効なヒットにするためにはちょっとコツがあって……」

「ちょっと休憩しましょうよ」

「もう一回だけ」

コインを投入しようと身を屈めたユキに、

「もういいって」

ムツは半ば吐き捨てるように言った。

その拍子に、ユキが手首にかけていたビニール傘が床に倒れた。先端に蓄えられていた水滴がじわりと全体に広がり、柄の近くの結び目にまで届く。

「じゃあ、来た意味ないですね」

苦笑いがかろうじて余裕を偽造しているものの、その声は震えていた。

「私、お義母さんにやりたいこと、やってほしいんです。余計なお世話だって、わかってるけど。でも……なんていうか、もっと楽しんでほしい。いろんなこと……」

夫の亡くなった日を境に、ムツは音も無く反転した。ユキは出来ることならムツをかつての姿にもう一度、どうにかして反転させたかった。

そう決心したのは、ユキが妊娠を打ち明けた晩だった。

報告を受け、久弥は文字通り飛び上がって喜んだ。ユキは元々出来にくい体質であり、言葉にはしなかったものの、夫婦は長い間お互いにそれを気に病んでいた。親戚の口さがない人々の間では、種が悪い、いや畑が悪いと噂にもなっていた。

月曜の晩というのに二本目のビールを空けた久弥の前で、ムツは柔和に微笑んでいた。喜んでくれているのだろう、と初めは思った。だが彼女はその後も一切、意味のある言葉を発しなかった。「そう」「へえ」「まあ」ほとんどが感嘆詞で、具体的には何も言っていないのだ。

ユキは気がついた。柔和な笑みと感嘆詞。それはムツがテレビ番組を観ている時の反応である。

「ごめんなさいね。気つかわせちゃって」

「……いいえ。とんでもないです」

「退屈したでしょう」

「……」

「一人で来た方が楽しいわよ、きっと」

「そんなこと……。私、私はお義母さんと来たかったんです。どうしても。……ゲーセンなんて、たしかに失敗だったかもしれないですけど。お義母さんに、趣味とか、何でもいいから楽しみを見つけてほしくて。……あ、旅行とか、どうです？ 二人で行きましょうよ。久弥さんはお留守番。嫁姑水入らず、みたいな」

「もういいのよ」

「……………いい？」

「あの人がいないから。もういい。もう、大丈夫」

ユキは臓腑で何かが黒く煮凝るのを感じた。

旦那が死んでからぬけがらになった。

その変わり様を親戚や近隣の人々はそう理解した。けれど、それがまったく違うことをユキは理解していた。むしろ逆である。その小さな体には今も昔もムツ自身がぱんぱんに詰まっている。

「そんなの、らしくないですよ。人生、これからです……これからでっせ」

わざと明るく言い直したとき、

「これから、何？」

この日初めて二人の目が合った。

「これから、何があるの？」

「……………何がっていうか」

「いいの。だってあの人がいないんだもの。いい。楽しいこととか、幸せとか、もうこなくて結構」

「……………よくわかんないです」

「そう？ ユキさんだって、同じじゃない？」

「……………同じ？」

「結納の時。覚えてない？ 私が、本当にこんな馬鹿息子が相手でいいのって聞いたの。そうしたら、あなたこう言った。久弥さんのいない人生なんて考えられないって」

記憶を辿ろうとするより先に、その日の光景がユキの脳裏によみがえった。

「……………ごめんなさいね。でも、無理したって仕方ないから。ユキさんは私のこと、いろいろ心配してくれてるけど、そういうのもとてもどうでもいい」

子供のことも？

と口にしかけたが、返答がおそろしくて聞けなかった。氷を日向に出せば溶ける、と信じていた自分が浅はかだったのだ。ユキは無意識のうちに腹部に手を添えていた。

ただ、足は自然とマシンの方に向いた。

流れるようにふたたびコインを投入する。

パネルの電飾がきらめき、メロディが鳴り、タコイカが出てきた。

ハンマーは重力を忘れたかのようにテーブルの上を飛び跳ねた。その動きは水切りに良く似ていた。無軌道に見えて、全て「タコ」「イカ」の指示通りーの、逆だった。

ユキはミスをした。何度も何度も間違え続けた。

「タ」と「イ」のみを聞き取って瞬時に反応して叩く。二音目は「ばーか」にかき消された。叩く力はマシンがミスを認識するぎりぎりのところで抑えられ、腕の力はむしろ穴から穴への移動に割かれていた。

ばーか

ばーか

ばーか

ばーか

タコとイカを指示とは逆に叩く。

それはある意味パーフェクトであるが、記録的には一分間何もせずに立っていたのと同じであった。ポイントは当然ながら0を表示したままびくともしなかった。ユキは半ば過呼吸になりかけながら、頭上に降る罵声を一心に浴び続けた。

.....ばっかだねえ。

ゲーム終了間際に聞こえた声が幻聴なのかどうか、ユキには判別がつかなかった。

いずれにせよ、言われなくともわかっていることだった。